特集①

手話を学ぼう！

手話を学んで会話できる人を増やせるのは魅力！

音が聞こえない、聞こえにくい状態を聴覚障害といいます。生まれつきの場合、病気や事故などで生じる場合、加齢などによる場合などがあります。全く聞こえなかったり、音が小さく聞こえたり、歪んだり響いて聞こえるため言葉として認識できなかったりと人によって症状はさまざまです。

見た目ではわかりにくいので、呼びかけや放送などが聞こえていないことを気づいてもらえなかったり、音による周囲の状況などの判断ができなかったり、多くの不便さを抱えています。聞きたいことを周囲の人に気軽に聞けないことも想像以上にストレスだそうです。

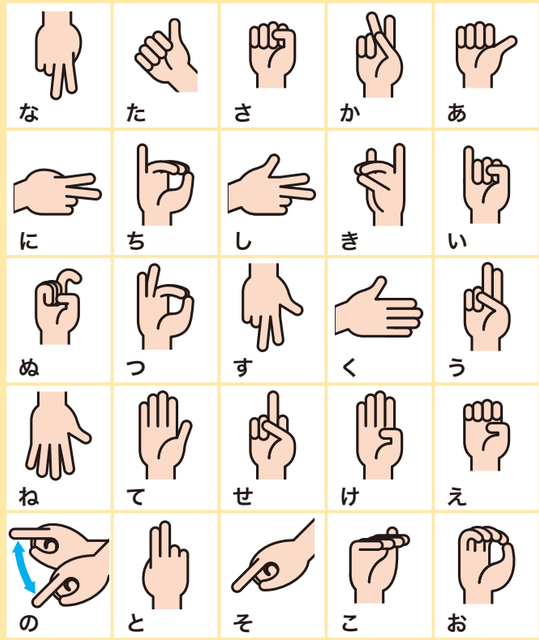
コミュニケーション手段としては、手話、指文字、口の動きで読み取る口話（読話・読唇）、筆談、要約筆記、最近ではスマホによるアプリの活用など色々な手段があります。

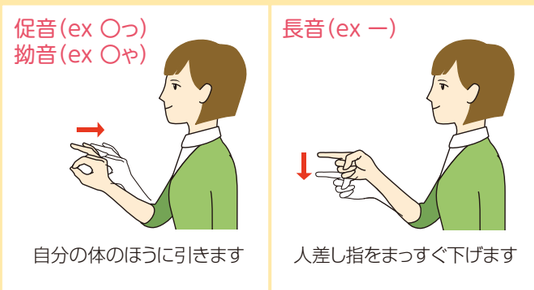
中でも、リアルタイムな会話として成り立つ手段が手話です。

聴覚障害者も健常の人も互いに手話を学ぶことで豊かなコミュニケーションをとることができます。手話は言語のひとつなのです。手話を学ぶことで、より多くの人と会話ができるようになるのが、手話・指文字を学ぶ一番の魅力です。

●指文字について

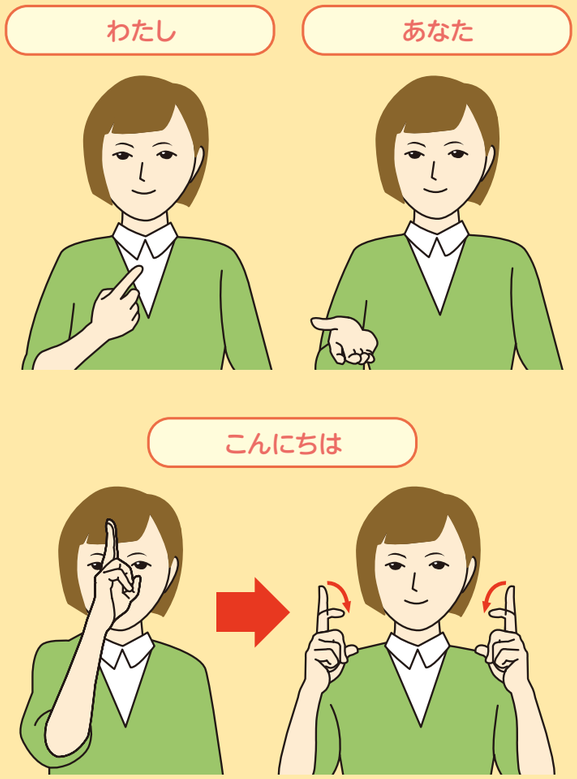
片手の指のカタチのみであいうえお50音と数字が表現できます。



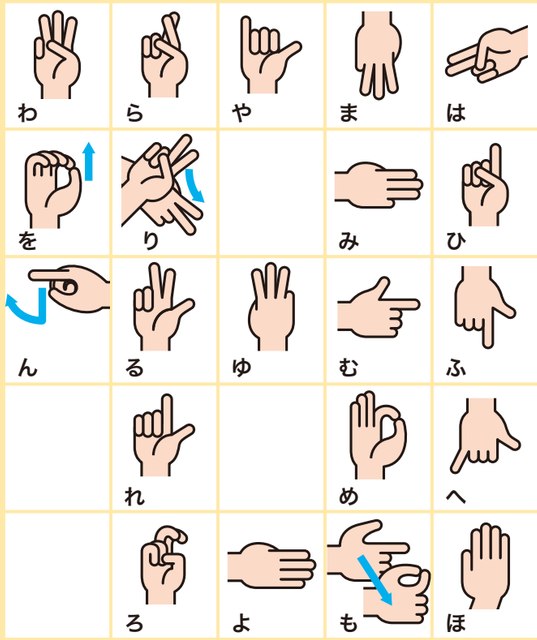


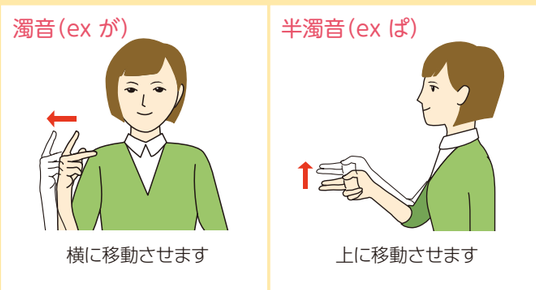
●手話について

標準語に加え方言や年代による手話の違いもあります。



指文字





【注釈】 ※イラストは相手が自分の手を見た時のカタチで描いてあります。

当事者インタビュー

聴覚障害の方は日々の生活の中で何を不便に思っているのか。当事者で、調布市で55年の歴史を持つ調布市聴覚障害者協会会長の井村茂樹さんに話を聞きました。

井村さんは、生まれつき耳が聞こえず、聾学校の幼稚部で発音の訓練を受け、小学校からは普通の学校に通いました。井村さんは普段は手話で話をしますが、手話を知らない健聴者と一緒の時は声も出してやりとりをします。

「子どもの頃は、相手の口の動きで話していることを理解し、こちらからは発声することでコミュニケーションをとっていました。しかし、後ろから声をかけられてもわからない、大勢の中での会話内容や学校の授業内容が理解できないといった孤独を感じていました。1970年代から各地で手話講習会が始まり、普及を見せていますが、私自身は大学入学後に覚えて、ようやくコミュニケーションの楽しさ、大切さを知りました」と語ります。

その後、パソコンや携帯電話、スマートフォンによるEメールやチャットなど、聴覚障害者にとっても便利なコミュニケーションツールが徐々に広まりました。

生活の中では不便だらけ

しかし、生活シーンの中では不便なことが多く、例えば電車が事故などで遅れると、アナウンスが流れますが、聴こえないため、何が起きたかが分かりません。最近では電光掲示板等で文字表示されるようになりましたが、まだリアルタイムでないため、情報が遅れることがあり、不安になります。

調布市聴覚障害者協会の井村会長

銀行のATMにはトラブル時に備えて受話器が設置されていますが、聴覚障害者は何か起きても電話ができず、状況を伝えられません。一方的に電話口で話すことを繰り返して異変に気づいてもらったり、他のお客さんにお願いして代わりにかけてもらったりするなどして対応せざるを得ないのが実情です。

救急車や消防車、警察を呼ぶ時も聴覚障害者は電話が使えないため、代わりにFAXやEメールで連絡しますが、どうしても即時性に欠け、対応が遅れがちになります。また、病院の診察や店の買い物などでは、手話を知っている人が限られるため、コミュニケーションをとるのに苦労しているようです。

聴覚障害者は、視覚障害者や肢体障害者と異なり、見た目は健聴者と変わらないため、障害者と気づきにくく、連絡やコミュニケーションなどでの苦労がなかなか理解されにくいとのことで、健聴者が考える以上に困ることが多々あるようです。「街でそのようなシーンを見かけたら、ぜひ憶することなく、声をかけて欲しい」と井村さんはいいます。

手話は聴覚障害者のことば

調布市聴覚障害者協会には、約40名の聴覚障害者と手話通訳者などの健聴者とを合わせて約100名所属。調布市社会福祉協議会が運営する「手話講習会」などに協力するほか、手話を通して交流を深める、学習会を設ける等、様々な企画を行なっています。例えば、手話による講演会や体操教室、手芸品を作る「手しごと会」、日帰りバスツアーなど多岐にわたります。

「手話は聴覚障害者にとって、相手との壁がなくなり、コミュニケーションを楽しむことができることばです。色々な方にも覚えて頂くことで、お互いの人生をより豊かにできると思います」と井村さん。

高齢者体操&交流会の様子

健聴者との交流イベント「手しごと会」

井村さんは調布市在住で結婚されていてお子さんが2人いらっしゃいます。映画が好きでよく映画館にもでかけるそうです。昔は邦画の字幕上映の映画館が少なく、かつ上映期間も限られていたため、遠くの映画館に行くなど苦労しましたが、最近は、スマートグラスというメガネ型端末を装用することで上映時にレンズに字幕が表示されるようになり、映画を楽しむ機会が増えました。「調布は映画のまち。聴覚障害者も気軽に映画が楽しめるまちにしたい」と話します。

行きかう人が手話で挨拶する街を

最後に手話ができない人はどうすればいいのか聞いてみました。

「まずは音や言葉が聞こえない人がいることを知って欲しい。また、手話ができなくても筆談やジェスチャーでコミュニケーションはとれます。ぜひ気軽に接してみてください。聴覚障害者は、ちょっとしたことでもコミュニケーションがとれることを楽しみにしています。できたらぜひ手話も学んでみてください。街を行きかう人が手話で『よう』とか『寒いね』『調子どう？』なんて声をかけ合える街っていいですよね。そんな街って、障がいの有無に関係なく、誰もが暮らしやすい街だと思います」